

書評

遠藤ゆり子著

『中近世の家と村落—フィールドワークからの視座—』（岩田書院、二〇一七年）

朝比奈 新

一
本書は、著者が十数年にわたるフィールドワーク調査の成果報告に重きを置いて著したものである。前年に一冊目の論文集『戦国時代の南奥羽社会—大崎・伊達・最上氏—』（吉川弘文館、二〇一六年）を上梓し、その成果を公表したばかりであるが、本書はすでに二冊目の単著となる。二〇〇三年以降の既発表論文を中心とした構成であるが、第二部第五〜八章に関しては、二〇〇五年に立教大学大学院に提出した博士課程論文「中近世移行期の地域社会」第三部第八〜一〇章を改稿したものとなっている。まず本書の目次と各章の内容について簡単に紹介しておきたい（目次の副題は省略した）。

二

序章 本書の視角と構成

第一部 村を歩く

第一章 名主屋敷と寺地の交換伝承をたどる

第二章 株のある村

第三章 産金と肝煎家の氏神

第四章 水利調査からみた村落

第二部 宗門帳からみた村落

第五章 縁組みと奉公契約

第六章 村と小村

第七章 生業からみた村落

第八章 村落とイエ

序章では、本書における村落の理解など研究史を整理した上で、課題を三点述べられている。一点目は、中世村落論によって、中近世移行期という時代の捉え方が定着したことを踏まえて、近現代から近世、さらに中世後期へと遡及して百姓の家や村落などを考えていくとしている。二点目は、百姓の家と村落の成立時期に関して、中世史と近世史の研究者間で意見の隔たりが見られるなか、著者は、百姓の家の成立を家名・家産などの指標によってではなく、蔵持重裕氏のいう法人格としての百姓の家の存在を前提に、村落の成立について検討を加えていくべきだという。

遠藤ゆり子著『中近世の家と村落―フィールドワークからの視座―』（朝比奈）

それにより、本章第二部で取り上げた地域においても、村落と家の問題を議論の遡上に載せることが可能になったという。三点目は、フィールドワーク調査の成果により明らかとなった多様な社会集団の存在が、百姓の生活・生存にとつてどのような意味を持ち、村落の存続問題とどのような関わっていたのかを追求していくとした。

第一章では、武蔵国榛沢郡荒川村（現埼玉県深谷市荒川）に伝わる名主家と村寺寿楽院が敷地を交換したという伝説に導かれつつ、フィールドワーク調査の成果をもとに村落の意義を考察している。荒川村は、三地区で構成され、一家中や庚申講といった多様な社会集団を内包しつつ、一つの村の形を成していた。さまざまな社会的集団や有力家が、有機的に機能し合うことで、村の人々の生活と生存が可能になっていたのである。敷地交換の伝説は、天正一六（一五八八）年段階における荒川村での宿や耕地の開発が背景にあった。開発は、災害や戦争による人口減少のため、近隣との競合関係の中で人の確保を進めなくてはならなかった。このような生存の危機が、村寺寿楽院を紐帯することで、地区や社会集団の枠組みを超えて、一つの「村」として再開発を協力し合うようになるという。

第二章では、和智荘安栖里村（現京都府丹波町安栖里）を対象としたフィールドワーク調査の成果を踏まえ、村の

様子を立体的かつ動態的に描いている。近世までの村の機能を残している現在の安栖里地区には、片山氏等の旧家が確認できる。これら有力家のなかには、名字を冠して株親となり、株と呼ばれる擬制的同族集団を形成していた。株は村内に限定されており、構成員の生活・生業、そして生存に関わる問題を、村内部で保障する集団であった。血縁や縁組みではなく、同じ名字を名乗り、定期的に集い、同じ先祖を祀ることで、同族意識を創り出していたのである。安栖里村に生きた人々は、イエ、株、講といった多種で重層的な社会集団を創出していたが、それぞれの集団はどれも生きていくために必要なシステムであったという。

第三章は、陸奥国東磐井郡津谷川村（現岩手県一関市）平原にある雷神社について、「お精進」とも呼ばれる講を中心とした聞き取り調査による成果と「畠山家文書」をもとに、産金業との関係から考察したものである。雷神社は、中世段階から産金業を主導してきた肝煎畠山家によって祀られたとされている。畠山家の氏神ではあったが、産金とつながりが深い地域の家々によって営まれていた講に支えられ、地域を結びつける信仰上の中心としても存在していた。一八世紀には、村内寺院の金剛院が畠山家に代わって祭礼を執り行うようになると、奉納米をめぐる利権争いが見られるようになる。一九世紀中頃に、同地域での金の採

取は困難となるなか、他村に展開していた畠山家の親類が神輿修復費用を融通し、雷神社と本家畠山家の存続を図っていたことを明らかにした。

第四章は、和泉国木島地域（現大阪府貝塚市）での調査をもとに、水利システムから五ヶ村の実態や意義を追求したものである。木島地域の水利は、近木川から取水する用水による灌漑と、溜池による灌漑という、大きく二つの方法が存在していた。この溜池による灌漑は近木川から取水した用水を溜池に流し込み利用しており、一三世紀以後段階的には形成された可能性が高いという。溜池は管理が村単位に任されており、五ヶ村の自律性が見て取れるが、水路は各村が共同で利用し、維持・管理が行われていた。木島地域で見られた村を越えた形での水利システムこそが、中世段階での、木島荘という荘園でのまとまりでもあったと結論付けた。なお、本章の成果は、共著者の小林一岳氏と増山智宏氏とともにまとめたものである。

第二部の第五く八章は、上野国緑埜郡三波川村（現群馬県藤岡市）でのフィールドワーク調査の成果をもとに、村に生きる人々の実態に迫っている。戦国時代から江戸時代にかけて三波川村で名主を務めていた飯塚家に伝来している元禄五（一六九二）年作成の宗門帳を主な素材として、村落居住者の縁組み関係、イエの展開状況の復元を行って

いる。

第五章は、元禄五年当時の三波川村居住者に関する出身の家や村、また家族・親族の縁組み先、および奉公先に関する記述に注目して、縁組みと奉公契約の関係を復元している。地域的な縁組み先は小村によって大きな違いが見られるが、村内の縁組みは年貢納入義務の有無に規定されていたため、高持百姓家族間、家抱・門前家族間で行われていた。名主家の縁組み関係は、村の外交を担う家であることを求められていたため、他村の名主家などの縁組みを結ぶ傾向があった。奉公契約は、すでに縁組み・奉公関係のある村内小村や他村といった、日常的なつきあいを通して結ばれていた。一見、閉鎖的に見える山間の村だが、地域社会との広いつきあいを展開していたことを明らかにした。

第六章は、三波川村にある一七の小村の縁組み・養子・奉公契約関係・檀家関係、村内における年貢のあり方、地親―家抱関係について整理している。地親―家抱関係の解消については、研究史によって隷属農民が解放され始め、本百姓体制へ向けて動き始めたと位置付けられていた。しかし、家抱を離れることは、年貢諸役を村（名主）に納める義務を負うことを意味する。そのため、地親―家抱関係を維持するほうが、地親に年貢諸役を立て替えてもらえ、

年貢未進も可能となる。従来のように、本百姓体制へ向けた政策の浸透によって家抱は解放されたとは位置づけられないという。そして、地親—家抱関係だけでなく、奉公関係、縁組み関係にも、生活維持に努める人々の保障システムとして機能していた側面があるという。

第七章は、食糧自給率の低い三波川村が、年貢諸役を負担する村落として成立し、一つの村として存続しえたのか検討している。近世の三波川村は、村内には田地はなく畑地のみであったため、山での秣や薪といった資源が、村人の生活には必要不可欠であった。近隣村との間で共同利用される御荷鉾山では、秣利用は容認していたものの、薪の採取は禁じられていた。そのため、薪を採取する権利を得るには、共同利用される山で畑を開発し、領主への年貢納入を意味する帳面に載る必要があった。耕地が帳面に載ることでも村の山であることの正当性が得られるという。薪を売って生計を立てていた三波川村では、山野資源をめぐる近隣村との紛争に臨むにあたって、散在する小村が一つの村にまとまる必要があった。そこに三波川村が小村高ではなく村高に固執した理由があったと指摘する。

第八章は、百姓の親族結合であるイエが果たした役割について、移住の事例を通して、戦国時代と近世との歴史的 성격の違いを検討している。他所への移住を可能にするに

は、まず移住者を出す家の親類と村、受け入れた家とその村は、村（の名主）に対して移住者の素性を保証しなければならなかった。他所に家族や親族がいることで、移住が容易になったのである。戦国時代、他村の者を村に入れるということは、敵方へ情報が漏洩する危険もあったが、敵方の情報を得ることができ、村のために役立ったのも事実であった。村を越えて広がるイエは、村の戦争被害を軽減させ、回避させる役割を果たしていた。戦争の有無という社会の変化において、戦国時代と近世とのイエの役割の違いを見いだしている。

三

以上の内容を踏まえて、本書の成果と今後の議論の深化が望まれる論点を述べるとする。第一に、著者が行った研究手法に関して触れていきたい。フィールドワークによる調査を踏まえ、百姓の親族結合を意味するイエ、村内寺社の檀家や氏子といった宗教的組織、株・講・区・組といった地縁・血縁集団、村を越えて展開する水利組合などを明らかにされた。このような、諸集団・諸組織が重層的に展開する動向を捉えたことで、立体的で動態的な村落像を描き出した点は、本書の中でも大きな成果といえる。特に第五〜第八章においては、三波川村に伝わる一七世紀末の宗門

帳から、村人の縁組み・奉公契約関係の復元、それと関連して展開した生活・生業や、イエと村落との関係性について、多元的な視点から立体的に一村落を描き出している。

著者が三波川村等で行った研究方法は、地域の自然的・歴史的・社会的条件を考慮しつつ、そこにおける人々の構成する集落や生業を具体的に捉えるといった、近世史研究者の塚田孝氏が重要性を指摘する存在形態論的な研究の流れにあるといえる。塚田氏は、地域社会の把握の方法について多大な示唆を受けた町田哲氏の研究を例にあげ、自然的条件や、集落・村役人・家・座・講といった一定の形をとった組織や社会関係、あるいは村落運営をめぐる実践的行為、政治的支配との関係などまでを射程に入れ、またそれらの要素を村落という場において統一して把握することで、一つの立体的な村落構造・地域社会構造を描くことが可能になってくるという。

まさに、塚田氏が指摘する存在形態論的な研究方法を用いて、村落を立体的に描き出すことに成功した著者であるが、中世の村落研究において長年用いられていた手法である、機能論によって浮き彫りとなった中世村落論の中で位置づけて論じていない。ここで述べる機能論とは、塚田氏によれば、収集分類型による分析と共通するものであるといい、関連史料から一定の関心に基づいて要素を抜き出

し、そこに現れた機能の存在を確認するという極めてオーソドックスな手法のことである。²⁾このような手法によって明らかとなった村落と、著者がフィールドワークによって立体的に描き出すことに成功した村落とは、どのような点で違いが見いだせるのであろうか。この点について紙幅を割いて言及する必要があったのではないだろうか。

第二に、著者が長年かけて行ったフィールドワーク調査によって、失われつつある村落の景観や伝承を記録化できたことが、地域社会を扱う中世史・近世史研究者にとって貴重な研究資源となっている点をあげる。第四章で取り上げている和泉国木島地域の景観について、著者と共に執筆を担当した増山智宏氏の指摘によって、二〇一七年現在、諸池を統廃合し、調整池をつくる計画が進められているという。今後、著書で取り上げた水利景観はみることができないのである。また、第一～三章において取り上げていた講や株といった諸集団、それらによって執り行われていた祭礼についても、高齢化や過疎化によって存続が危機的状況に置かれている。現在、圃場整備前の地域の状況を知る古老の方々が少なくなるなか、聞き取り調査による景観の復原は、難しくなってきた。現地でのフィールドワーク調査が減少傾向にある状況において、本書のように、調査成果を刊行することは、大きな意義があると考える。さ

遠藤ゆり子著『中近世の家と村落―フィールドワークからの視座―』（朝比奈）

らに、著者は研究成果を研究者のみならず、地域に還元することも意図して、フィールドワーク調査を行っている。近年では、勤務する大学の授業の一環として、学生と石造物調査を実施している。その結果、中世の石造物が新たに発見され、その成果を報告書や論文に掲載したことで、地域の文化財保護に大きく貢献しているのである³⁾。

しかし、著者が行ったようなフィールドワークによる調査や公開の方法にも課題がないわけではない。著者が行ってきたフィールドワーク調査は、科学研究費による助成金などを得た形で、大学院生など若手の研究者を動員した大きな規模で実施されていた。しかし、近年は助成金などが縮小傾向にあり、頼みの大学院生の数も少なくなる中、従来の方法では調査は難しい状況となっている。今後は、個人規模でも調査ができるような方法を、新たに模索する必要性に迫られてきている。個人規模の調査のみで報告書⁴⁾を刊行した貴田潔氏は、GISソフトを使用しており、デジタル技術の活用が、少数者での調査では重要になってくると思われる。

現在、普段我々が携帯しているスマートフォンやタブレット端末にはGPSやカメラが内蔵されており、撮影データに位置座標を書き込むことが可能となっている。通信機能の向上により、カシミールだけでなくグーグルマッ

プやウェブ公開している国土地理院の地形図が、現地でありアルタイムに活用できるようになってきている。調査成果もグーグルマップのマイマップ機能を使えば共有もできる⁵⁾。また、従来は多くの調査者によって行われていた作業の集約も、GISソフトを活用して、明治期地籍図に描かれた地割を空中写真の上に復元して、灌漑範囲や検地帳の情報を追加していくことで、少ない人数で景観復元作業が可能となる。

さらに、現地調査の成果によって得られた情報の公開方法についても、文献史料のように、文書の活字化やデジタル画像の公開による情報共有が進んでいない。本書や調査報告書においては紙幅の問題もあり、調査によって得られた、全ての情報を知ることが不可能に近い。この問題に対処するには、デジタル技術をいかに活用するかが課題である。先述したようなGISソフトを使用した調査成果の公開・共有が重要となると考える。ウェブ上での調査成果の公開が可能となれば、文献史料のような批判的検討も可能となろう。

四

評者の力量不足により、フィールドワーク調査の手法に偏った書評に終始したことを、深くお詫びする。先述した

ように、開発や過疎化により前近代的な景観が失われていく現在、著者が行ってきたフィールドワーク調査による成果は、中世・近世史以外の時代や分野を超えた形で、広く共有されるべき貴重な情報となりつつある。本書が中世・近世史の村落研究者のみならず、地域史に関心がある多くの方々にとっても重要な一冊であることは間違いない。

註

- (1) 塚田孝「地域史研究の視点」『飯田市歴史研究所年報』五、二〇〇七年。大山喬平「ムラの新たな研究のために」『日本中世のムラと神々』(岩波書店、二〇一二年)。
- (2) 塚田孝「歴史学の方法をめぐって―永原慶二『20世紀日本の歴史学』に触発されて―」『歴史科学』一七八、二〇〇四年。
- (3) 遠藤ゆり子「志村延命寺・前野町東熊野神社・志村熊野神社の石造物調査」『淑徳大学人文学部 研究論集』第三号、二〇一八年。
- (4) 貴田潔編著『筑後国水田荘故地調査報告書(地誌編・史料編補遺)』(服部英雄研究室・花書院、二〇一四年)。
- (5) 井上聡「荘園絵図調査の実践から」『民衆史研究』八五、二〇一三年。渡邊浩貴「圃場整備後の現地調査の可能性」『年報三田中世史研究』二二、二〇一五年。

(本学文学部兼任講師)